

# グラム・シュミットの直交化

数理工学 第3回

小林 健/ Ken Kobayashi

東京科学大 工学院 経営工学系

2025 年 10 月 09 日

# 目次

- ① 直交行列
- ② グラム・シュミットの直交化法
- ③ QR 分解

# 目次

## ① 直交行列

## ② グラム・シュミットの直交化法

## ③ QR 分解

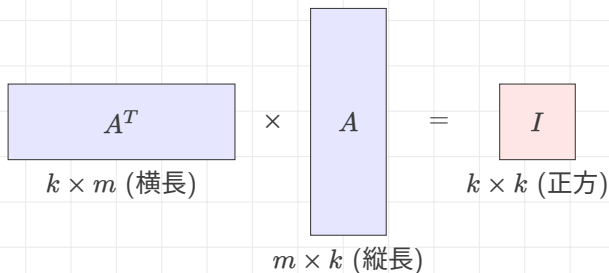
## 正規直交基底を列ベクトルとする行列の性質

- 部分空間  $W \subseteq \mathbb{R}^m$  の正規直交基底を  $\mathbf{y}_1, \mathbf{y}_2, \dots, \mathbf{y}_k \in W$  とする (ただし  $k \leq m$ ).
- 正規直交基底のベクトルを並べた行列を

$$A = (\mathbf{y}_1, \mathbf{y}_2, \dots, \mathbf{y}_k) \in \mathbb{R}^{m \times k}$$

とすると,

$$A^T A = I \in \mathbb{R}^{k \times k}.$$


$$\begin{array}{c} \boxed{A^T} \\ k \times m \text{ (横長)} \end{array} \times \begin{array}{c} \boxed{A} \\ m \times k \text{ (縦長)} \end{array} = \boxed{I} \quad k \times k \text{ (正方)}$$

$k = m$  の場合

- この場合  $W = \mathbb{R}^m$  であり  $\mathbf{y}_1, \mathbf{y}_2, \dots, \mathbf{y}_m$  は  $\mathbb{R}^m$  の正規直交基底 ( $\because \dim \mathbb{R}^m = m$ ).
- 行列  $A$  は  $m$  次正方行列で,  $A^T A = I \in \mathbb{R}^{m \times m}$  は次のように表される:

$$\begin{array}{ccc} \boxed{A^T} & \times & \boxed{A} = \boxed{I} \\ m \times m \text{ (正方)} & & m \times m \text{ (正方)} \end{array}$$

↪ この性質を満たす正方行列を直交行列と名付ける.

### 定義 (直交行列)

正方行列  $A \in \mathbb{R}^{m \times m}$  が  $A^T A = I$  を満たすとき,  $A$  を直交行列 (orthogonal matrix) という.

# 直交行列の性質

## 定理 (直交行列の諸性質)

正方行列  $A \in \mathbb{R}^{m \times m}$  を直交行列とする. このとき,

(1)  $A^T = A^{-1}$  (すなわち,  $A^T A = A A^T = I$ ).

(2) 任意の  $\boldsymbol{x} \in \mathbb{R}^m$  に対して  $\|A\boldsymbol{x}\| = \|\boldsymbol{x}\|$ . (等長性)

(2) の性質は,  $A$  による線形変換では長さが変わらないことを意味する.

## 補足 (逆行列の定義)

正方行列  $A \in \mathbb{R}^{m \times m}$  に対して,

$$AX = XA = I$$

を満たす行列  $X \in \mathbb{R}^{m \times m}$  が存在するとき,  $X$  を  $A$  の逆行列とよび  $A^{-1}$  と表す.

# 直交行列の積に関する性質

## 直交行列の性質: 直交行列の積は直交行列

$A, B \in \mathbb{R}^{m \times m}$  を直交行列とする. このとき  $AB$  も直交行列である.

証明  $(AB)^T(AB)$  を計算すると

$$(AB)^T(AB) = B^T A^T AB = B^T B = I.$$

よって  $AB$  は直交行列.



$\mathbb{R}^2$  の場合 以下の行列は直交行列 (各自確認せよ).

$$R = \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}, \quad G = \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ \sin \theta & -\cos \theta \end{pmatrix} \quad (\theta \in \mathbb{R})$$

- $R$  は  $\theta$  だけ反時計周りに回転させる線形変換
- $G$  は  $x$  軸とのなす角が  $\theta$  である直線に関する折り返しを表す線形変換

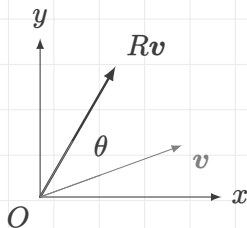


Figure:  $R$  による回転

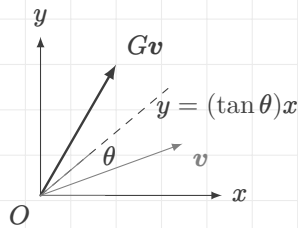


Figure:  $G$  による折り返し

⇒  $R, G$  が等長性を満たすことは直観的にも理解できる.



# 目次

① 直交行列

② グラム・シュミットの直交化法

③ QR 分解

# 正規直交基底のありがたみ

## 定義 (正規直交基底, 再掲)

部分空間  $W$  の基底  $\mathbf{y}_1, \mathbf{y}_2, \dots, \mathbf{y}_k$  の各ベクトルのノルムが 1 で互いに直交するとき, 正規直交基底 (orthonormal basis) という.

## 正規直交基底の利点

- 内積やノルムの計算が簡単になる
- 部分空間への射影の計算が簡単になる
- 内積空間全体の正規直交基底から, 直交行列を構成できる  
(直交行列の逆行列は転置をとるだけ)

〜 部分空間の基底から正規直交基底を構成したい

# グラム・シュミットの直交化法の流れ

部分空間  $W$  の基底  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_k$  から正規直交基底  $\mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2, \dots, \mathbf{q}_k$  を構成する

方針  $s$  番目までのベクトル  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_s$  が張る部分空間を

$$W_s := \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_s \rangle \quad (s = 1, 2, \dots, k)$$

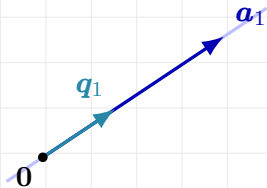
と表し,  $W_1, W_2, \dots, W_k$  の正規直交基底を帰納的に構成する.

$s = 1$  のとき

- $W_1 = \langle \mathbf{a}_1 \rangle$  であり,  $\mathbf{q}_1$  を次のように定義する:

$$r_{11} = \|\mathbf{a}_1\|, \quad \mathbf{q}_1 = \frac{1}{r_{11}} \mathbf{a}_1.$$

- $\|\mathbf{q}_1\| = 1$  であり,  $W_1 = \langle \mathbf{a}_1 \rangle = \langle \mathbf{q}_1 \rangle$ .
- よって  $\mathbf{q}_1$  は  $W_1$  の正規直交基底である.



## $s = 2$ のとき

- $W_2 = \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \rangle$  であり,  $\mathbf{q}_1$  は  $W_1$  の正規直交基底である.
- $\mathbf{a}_2$  の  $W_1$  への射影を求める. 正規直交基底を用いた射影の計算の仕方に従って

$$r_{12} := (\mathbf{q}_1 \cdot \mathbf{a}_2)$$

として  $\mathbf{p}_2 = r_{12}\mathbf{q}_1$  とする. このとき  $\mathbf{p}_2$  は  $W_1$  への射影である.

- 射影の定義から  $\mathbf{a}_2 - \mathbf{p}_2$  は  $\mathbf{q}_1$  と直交. また,  $\mathbf{a}_2 \notin W_1$  なので,  $\mathbf{a}_2 - \mathbf{p}_2 \neq \mathbf{0}$ .
- $r_{22} := \|\mathbf{a}_2 - \mathbf{p}_2\| (> 0)$  として

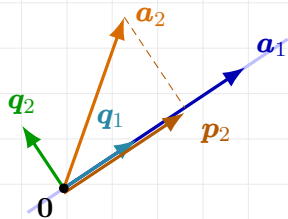
$$\mathbf{q}_2 = \frac{1}{r_{22}}(\mathbf{a}_2 - \mathbf{p}_2)$$

と定義する.

- このとき  $\|\mathbf{q}_2\| = 1$  であり,  $\mathbf{q}_2$  は  $\mathbf{q}_1$  と直交. また,

$$W_2 = \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \rangle = \langle \mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2 \rangle$$

であり,  $\mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2$  は  $W_2$  の正規直交基底である.



一般の  $s$  のとき ( $3 \leq s \leq k$ )

- 互いに直交するノルムが 1 のベクトル  $\mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2, \dots, \mathbf{q}_{s-1}$  が求まっており,

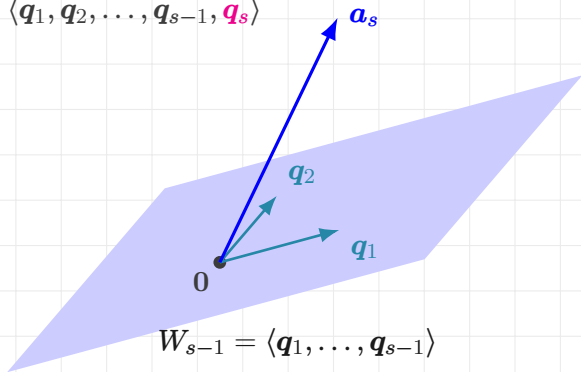
$$W_{s-1} = \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_{s-1} \rangle = \langle \mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2, \dots, \mathbf{q}_{s-1} \rangle$$

が成り立っていると仮定する.

- この仮定のもと,

$$W_s = \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_{s-1}, \mathbf{a}_s \rangle = \langle \mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2, \dots, \mathbf{q}_{s-1}, \mathbf{q}_s \rangle$$

かつ,  $\mathbf{q}_1, \dots, \mathbf{q}_{s-1}$  いずれとも直交する  
ノルムが 1 のベクトル  $\mathbf{q}_s$  を求める.



- $\mathbf{a}_s$  の  $W_{s-1}$  への射影を求める.  $\mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2, \dots, \mathbf{q}_{s-1}$  は  $W_{s-1}$  の正規直交基底なので,

$$r_{is} := (\mathbf{q}_i \cdot \mathbf{a}_s) \quad (i = 1, 2, \dots, s-1)$$

とすると,

$$\mathbf{p}_s = \sum_{i=1}^{s-1} r_{is} \mathbf{q}_i$$

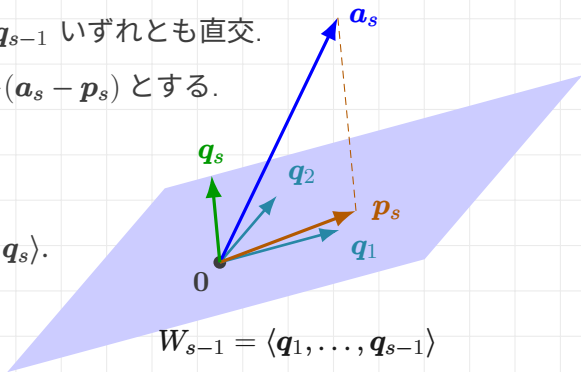
は  $W_{s-1}$  への射影である.

- 射影の定義から  $\mathbf{a}_s - \mathbf{p}_s$  は  $\mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2, \dots, \mathbf{q}_{s-1}$  いずれとも直交.

- $r_{ss} := \|\mathbf{a}_s - \mathbf{p}_s\| (> 0)$  として  $\mathbf{q}_s = \frac{1}{r_{ss}}(\mathbf{a}_s - \mathbf{p}_s)$  とする.

- $\mathbf{q}_s$  はノルムが 1 のベクトルであり,  
 $\mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2, \dots, \mathbf{q}_{s-1}$  いずれとも直交し,

$$W_s = \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_s \rangle = \langle \mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2, \dots, \mathbf{q}_s \rangle.$$



## 例題

次の3つのベクトルが張る部分空間の正規直交基底を構成せよ:

$$\mathbf{a}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 2 \\ -4 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{a}_2 = \begin{pmatrix} -2 \\ -1 \\ -4 \\ 2 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{a}_3 = \begin{pmatrix} -3 \\ 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}.$$

- $s = 1$  のとき,

$$r_{11} = \|\mathbf{a}_1\| = 5, \quad \mathbf{q}_1 = \frac{1}{r_{11}}\mathbf{a}_1 = \frac{1}{5}\mathbf{a}_1 = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 2 \\ -4 \end{pmatrix}.$$

- $s = 2$  のとき,  $\mathbf{a}_2$  と  $W_1 = \langle \mathbf{a}_1 \rangle$  の正規直交基底のベクトルとの内積は

$$r_{12} = \mathbf{q}_1^T \mathbf{a}_2 = -4.$$

よって,  $\mathbf{a}_2$  の  $W_1 = \langle \mathbf{a}_1 \rangle$  への射影  $\mathbf{p}_2$  は

$$\mathbf{p}_2 = r_{12}\mathbf{q}_1 = -4\mathbf{q}_1 = -\frac{4}{5} \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 2 \\ -4 \end{pmatrix}.$$

したがって,  $\mathbf{q}_1$  と直交するベクトル  $\mathbf{a}_2 - \mathbf{p}_2$  とそのノルムは次のように求まる:

$$\mathbf{a}_2 - \mathbf{p}_2 = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} -6 \\ 3 \\ -12 \\ -6 \end{pmatrix}, \quad r_{22} = \|\mathbf{a}_2 - \mathbf{p}_2\| = 3.$$

$\mathbf{a}_2 - \mathbf{p}_2$  をノルムが 1 となるよう正規化する:

$$\mathbf{q}_2 = \frac{1}{r_{22}}(\mathbf{a}_2 - \mathbf{p}_2) = \frac{1}{3}(\mathbf{a}_2 - \mathbf{p}_2) = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} -2 \\ 1 \\ -4 \\ -2 \end{pmatrix}.$$



- $s = 3$  のとき,  $\mathbf{a}_3$  と  $W_2 = \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \rangle$  の正規直交基底のベクトルとの内積は

$$r_{13} = \mathbf{q}_1^T \mathbf{a}_3 = -1, \quad r_{23} = \mathbf{q}_2^T \mathbf{a}_3 = 1.$$

よって,  $\mathbf{a}_3$  の  $W_2 = \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \rangle$  への射影  $\mathbf{p}_3$  は

$$\mathbf{p}_3 = r_{13}\mathbf{q}_1 + r_{23}\mathbf{q}_2 = -\mathbf{q}_1 + \mathbf{q}_2 = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} -3 \\ -1 \\ -6 \\ 2 \end{pmatrix}.$$

したがって,  $\mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2$  と直交するベクトル  $\mathbf{a}_3 - \mathbf{p}_3$  とそのノルムは次のように求まる:

$$\mathbf{a}_3 - \mathbf{p}_3 = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} -12 \\ 6 \\ 6 \\ 3 \end{pmatrix}, \quad r_{33} = \|\mathbf{a}_3 - \mathbf{p}_3\| = 3.$$

$\mathbf{a}_3 - \mathbf{p}_3$  をノルムが 1 となるよう正規化する:

$$\mathbf{q}_3 = \frac{1}{r_{33}}(\mathbf{a}_3 - \mathbf{p}_3) = \frac{1}{3}(\mathbf{a}_3 - \mathbf{p}_3) = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} -4 \\ 2 \\ 2 \\ 1 \end{pmatrix}.$$

- 以上から, 正規直交基底

$$\mathbf{q}_1 = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 2 \\ -4 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{q}_2 = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} -2 \\ 1 \\ -4 \\ -2 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{q}_3 = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} -4 \\ 2 \\ 2 \\ 1 \end{pmatrix}$$

が得られた.

# グラム・シュミットの直交化法のまとめ

## グラム・シュミットの直交化法のアルゴリズム

- 1: **Input:** 線形独立なベクトル  $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k$  ( $W = \langle \mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_k \rangle$ )
- 2:  $s = 1$ ,  $r_{11} = \|\mathbf{a}_1\|$ ,  $\mathbf{q}_1 = \frac{1}{r_{11}}\mathbf{a}_1$ .
- 3: **for**  $s = 2, 3, \dots, k$  **do**
- 4:      $r_{is} = (\mathbf{q}_i \cdot \mathbf{a}_s)$  ( $i = 1, 2, \dots, s-1$ )
- 5:      $r_{ss} = \left\| \mathbf{a}_s - (r_{1s}\mathbf{q}_1 + r_{2s}\mathbf{q}_2 + \dots + r_{(s-1)s}\mathbf{q}_{s-1}) \right\|$
- 6:      $\mathbf{q}_s = \frac{1}{r_{ss}} \left( \mathbf{a}_s - (r_{1s}\mathbf{q}_1 + r_{2s}\mathbf{q}_2 + \dots + r_{(s-1)s}\mathbf{q}_{s-1}) \right)$
- 7: **end for**
- 8: **Output:**  $\mathbf{q}_1, \dots, \mathbf{q}_k$

# 目次

① 直交行列

② グラム・シュミットの直交化法

③ QR 分解

## QR 分解

グラム・シュミットの直交化における  $\mathbf{q}_s$  の計算

$$\mathbf{q}_s = \frac{1}{r_{ss}} \left( \mathbf{a}_s - \left( r_{1s}\mathbf{q}_1 + r_{2s}\mathbf{q}_2 + \cdots + r_{(s-1)s}\mathbf{q}_{s-1} \right) \right) \quad (s = 1, 2, \dots, k)$$

- 上の式を  $\mathbf{a}_s = \cdots$  という形に整理すると

$$\mathbf{a}_s = r_{1s}\mathbf{q}_1 + r_{2s}\mathbf{q}_2 + \cdots + r_{(s-1)s}\mathbf{q}_{s-1} + r_{ss}\mathbf{q}_s \quad (s = 1, 2, \dots, k).$$

- $s = 1, 2, \dots, k$  について書き下すと

$$\begin{cases} \mathbf{a}_1 = r_{11}\mathbf{q}_1 \\ \mathbf{a}_2 = r_{12}\mathbf{q}_1 + r_{22}\mathbf{q}_2 \\ \vdots \\ \mathbf{a}_k = r_{1k}\mathbf{q}_1 + r_{2k}\mathbf{q}_2 + \cdots + r_{(k-1)k}\mathbf{q}_{k-1} + r_{kk}\mathbf{q}_k \end{cases} \quad (1)$$

## QR 分解

- 3 つの行列  $A, Q \in \mathbb{R}^{m \times k}, R \in \mathbb{R}^{k \times k}$  を次のように定義する:

$$A = (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_k), \quad Q = (\mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2, \dots, \mathbf{q}_k), \quad R = \begin{pmatrix} r_{11} & r_{12} & \cdots & r_{1k} \\ 0 & r_{22} & \cdots & r_{2k} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & r_{kk} \end{pmatrix}$$

- このとき, 式 (1) は

$$A = QR$$

であり,  $A$  は列ベクトルが正規直交基底をなす行列  $Q$  と上三角行列  $R$  の積で表される.

- このような行列の分解を **QR 分解 (QR decomposition)** という.

### 定理 (QR 分解可能性)

行列  $A \in \mathbb{R}^{m \times k}$  の列ベクトルが線形独立ならば,  $A$  は QR 分解可能.

## 例題

$$\mathbf{a}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 2 \\ -4 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{a}_2 = \begin{pmatrix} -2 \\ -1 \\ -4 \\ 2 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{a}_3 = \begin{pmatrix} -3 \\ 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

を列ベクトルにもつ行列  $A = (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3) \in \mathbb{R}^{4 \times 3}$  の QR 分解を求めよ.

- 先の例題の結果より,  $\langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3 \rangle$  の正規直交基底

$$\mathbf{q}_1 = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 2 \\ -4 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{q}_2 = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} -2 \\ 1 \\ -4 \\ -2 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{q}_3 = \frac{1}{5} \begin{pmatrix} -4 \\ 2 \\ 2 \\ 1 \end{pmatrix}$$

と  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  は次の関係にある:

$$\mathbf{a}_1 = 5\mathbf{q}_1, \quad \mathbf{a}_2 = -4\mathbf{q}_1 + 3\mathbf{q}_2, \quad \mathbf{a}_3 = -\mathbf{q}_1 + \mathbf{q}_2 + 3\mathbf{q}_3$$

- よって, 行列  $A$  は

$$\begin{aligned} A = (\mathbf{a}_1 \quad \mathbf{a}_2 \quad \mathbf{a}_3) &= (\mathbf{q}_1 \quad \mathbf{q}_2 \quad \mathbf{q}_3) \begin{pmatrix} 5 & -4 & -1 \\ 0 & 3 & 1 \\ 0 & 0 & 3 \end{pmatrix} \\ &= \underbrace{\frac{1}{5} \begin{pmatrix} 1 & -2 & -4 \\ 2 & 1 & 2 \\ 2 & -4 & 2 \\ -4 & -2 & 1 \end{pmatrix}}_Q \underbrace{\begin{pmatrix} 5 & -4 & -1 \\ 0 & 3 & 1 \\ 0 & 0 & 3 \end{pmatrix}}_R \end{aligned}$$

と直交行列  $Q$  と上三角行列  $R$  の積として表される.



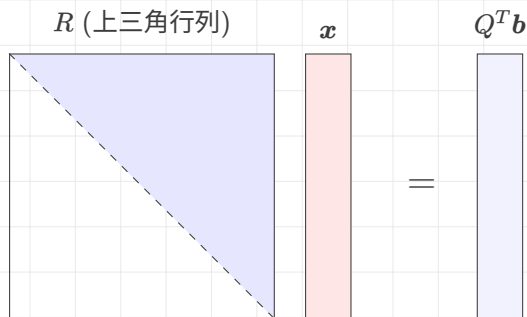
## QR 分解を用いた最小 2 乗法

- 射影計算で解く次の正規方程式について考える:

$$A^T A \mathbf{x} = A^T \mathbf{b}.$$

- $A = QR$  と QR 分解した結果を代入すると

## 後退代入による線形方程式の求解

$$R \text{ (上三角行列)} \quad x = Q^T b$$


- 一番下の行に注目すれば、 $x$  の末尾の成分は直ちに求まる。
- この結果を下から 2 番目の行に代入すれば、 $x$  の下から 2 番目の成分が求まる。
- 下の成分からの代入を繰り返して、 $x$  のすべての成分が求まる。

## 例題

$A = \begin{pmatrix} 3 & -6 \\ 4 & -8 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}, \mathbf{b} = \begin{pmatrix} -1 \\ 7 \\ 2 \end{pmatrix}$  とする. 正規方程式  $A^T A \mathbf{x} = A^T \mathbf{b}$  を QR 分解を用いて解け.

- $A$  の列ベクトルに対してグラム・シュミットの直交化法を適用すると,

$$Q = \begin{pmatrix} 3/5 & 0 \\ 4/5 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad R = \begin{pmatrix} 5 & -10 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

として,  $A = QR$  と QR 分解できる.

- したがって,  $R\mathbf{x} = Q^T \mathbf{b}$  は

$$\begin{pmatrix} 5 & -10 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3/5 & 4/5 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} -1 \\ 7 \\ 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 5 \\ 2 \end{pmatrix}.$$

- よって  $x_2 = 2, x_1 = \frac{1}{5}(5 + 10x_2) = 5$  と解が求まる.

# まとめ

## 講義の振り返り

- 直交行列の定義と性質
- グラム・シュミットの直交化法の手続き
- グラム・シュミットの直交化法に基づく QR 分解

## 自宅での復習

- グラム・シュミットの直交化法の例を自分でも計算する
- QR 分解を用いた最小 2 乗法の流れを確認する